

Users' Report vol.4

人と医療のあいだに…

JMS

Safewing cath

セーフウイングキャス



「理解」「納得」を促し、「実行」することが
正しい判断につながる

特定医療法人ダイワ会
大和中央病院



JMS has conducted careful research from the point "what is desirable for healthcare professionals", and developed and manufactured high-quality products, which meet the needs of the most advanced medical care.

「患者さん、スタッフに何が必要か」を考えた結果、 自院に適した商品と実感

大阪市中心部にて、最適な地域医療の提供を目指し、環境にも配慮した設備を整え、人に優しい医療を標榜する大和中央病院。

総看護長・仲光さんは当初、セーフウイングキャス（以下、SWC）について評価はされていたものの、様々な理由から採用を躊躇されていました。

今回は仲光さんを中心に、SWCを採用するまでの経緯や考え方の変化、また新しい器材を導入するにあたってどのような取り組みがなされたのかについて詳しく伺います。

はじめはいくつかの懸念点から 採用に難色を示していた。

「SWCのコンセプトには共感したものの、あまりにも翼状針と似ていたため、予想もしないヒューマンエラーが発生しないかとリスク面が気になりました。当院は、日勤だけでなく夜勤にも非常勤や長いブランクからの復職者など中途入職者が多く、経験や経歴が様々なので、日常業務の指導にも時間を要している上、SWCの研修の時間も必要となると大変だと思いました。患者さんに高齢者の多い当院にとっては有効な器材なのに、どうしようかと躊躇していました」と当時を語る仲光さん。



仲光 瞳 総看護長

現場の状況と商品への理解によって 高齢者の多い自院に価値があると判断。

同院では、新しい器材を検討する場合には、看護長会や主任会で仲光さんが紹介し、皆さんの意向を聞きながら評価・検討が進められます。SWCの検討においては看護長会で「高齢者や認知症の患者さんが増え、金属針はリスクが高いため翼状針をあまり使用しなくなっている」と現場の確認ができ、翼状針との取り間違えのリスクは少ないことが判明しました。

その会議に参加していた一般病棟看護長の波積さんはSWCを初めて見た時「やっと出たか！という感じだった」とおっしゃいます。「ほとんどの輸液療法で留置針を使用していますが、これまでの留置針はカテーテルが長すぎて、脆弱な高齢者の血管に大きな負担をかけてしまうリスクがあると感じていました」と語ります。

「地域柄、大和中央病院は高齢者の患者さんが大半を占めます。長時間の輸液療法を受ける患者さんも多く、翼状針では対応できず、長いカテーテルの留置針では、血管が細く蛇行している場合には逆に血管にダメージがあります。さらに認知症の患者さんも多く、自己抜去も稀に起こります。その場合、カテーテルの長さが短いSWCは自己抜去が発生しても血管を傷つけにくいという安全面の特長があると思います。このように、現場の状況と商品特性の『理解』を深めた結果、患者さんはもちろんスタッフの安心・安全のことを考えれば、大和中央病院にとってSWCは価値がある器材である」と仲光さんは確信しました。

新しい器材の導入を推進するために、 現場でも研修を行い“納得”を促した。

「指導する立場の人にしっかり商品を“理解・納得”してもらうことが大切だと思っています。今回もまず主任会及び新人看護職員研修委員会で研修を行い、きちんと指導が行えるようにしてからスタッフ研修へと進めました。“理解・納得”の輪が広がる仕組みです」と仲光さん。

さらに看護長代行の名本さんは「JMSの皆さんにも協力頂き、病棟ごとに実地研修も行いました。看護師が少人数ごとにしっかり近くから見ることで理解



度が全然違いました。人工模擬血管モデルを使った穿刺練習も納得が得やすかった」と現場でもきちんと『理解・納得』が得られた様子をお話されています。

また看護長会、主任会で実施した研修会には仲光さんも同席し、「翼状針を穿刺する感覚で、フラッシュバックの後もゆっくりと針を血管に入れば、カテーテルがきちんと血管に留置されます」と、実践的アドバイスにより模擬血管穿刺の成功率は一気にアップ。「現場の感覚をふまえて説明やアドバイスを行うことが、理解・納得を得るためには重要」と仲光さんは述べられています。



6F 一般病棟 看護長
波積 あおいさん

5F 一般病棟 看護長代行
名本 ともこさん

SWC 導入後、 安全性・感染防止の面で高評価。

「安全に関わる器材を選定する場合は、現場の声を重

内科医
ICC 委員長

小坂 佳代子先生



視しています。SWCは、血液曝露による感染防止、針刺し事故防止、使いやすさ、そのどれもが合格点です」と、内科医でICC委員長でもある小坂先生はおっしゃいます。

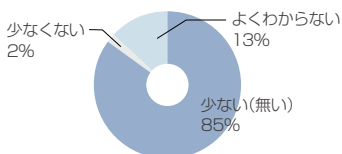
「事前に感染症だと分かる患者さんにはSWCを使うことで、看護師が自分の身を守るのが良いですね」と、現場の立場から波積さん。

また「針刺しリスクが減るのはもちろん、輸液ラインを接続した状態で穿刺でき、閉鎖的にライン確保ができるので安全ですし、患者さんもすぐに処置が済むので不安が少ないようです」と名本さんは語ります。

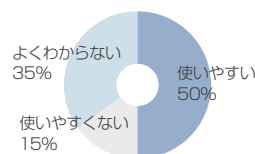
さらに現場の看護師に行ったアンケートでも、安全性や感染防止の点において、高い評価を得ました。SWCと従来の留置針との使い分けに関しては“半々”という結果で、SWCを使うケースとして「血管が出にくい・細い患者さん」「脆弱な血管」「蛇行気味の血管」「体動があり、液漏れしそうな患者さん」という答えが多く、やはり高齢者の施術に有効的に活用されていることがアンケートからも窺えます。

大和中央病院 SWC アンケート結果

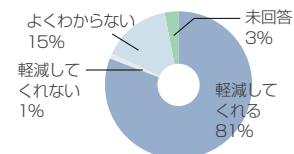
Q1 準備から固定(留置終了)までの血液汚染は少ない(無い)ですか?(既存品との比較)



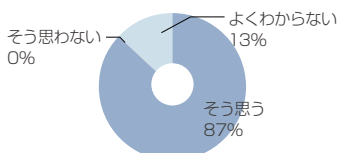
Q2 セーフウィングキャスは使いやすいですか?



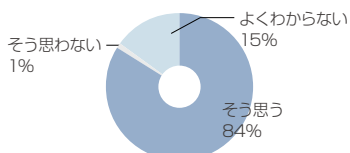
Q3 セーフウィングキャスは針刺し事故の不安を軽減してくれますか?



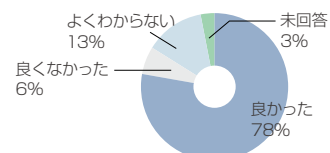
Q4 セーフウィングキャスは安全性に優れていると思いますか?



Q5 セーフウィングキャスは感染防止に優れていると思いますか?



Q6 セーフウィングキャスを導入して良かったですか?



今後、現場のスタッフに 新しい器材の導入を推進していくために

様々な経験や経歴の皆さんが勤務する医療現場で、新しい方針や器材を周知徹底させるのは、なかなか難しいことがあると思います。そのような環境の中で、どうやって推進していくべきか、課題は何なのか。仲光さんと、新人看護職員研修責任者でもある波積さん、名本さんにお話を伺いました。

しっかり研修できて、働き続けられる 環境づくりを進めていきたい。

「当院と同様規模の病院では、病院側から学習の機会を与えられることは少ないようです」と仲光さん。しかし仲光さんは「院内・院外研修予定表」を毎月作成し各病棟に配布することで、スタッフがお互いに協力して、スムーズに病棟を離れられるような環境を整え、院内研修を全て勤務時間内に行っておられます。また、内容によっては日勤勤務者全員が参加できるよう2部制の入れ替え式等で工夫して実施されています。さらにママナースが多いため「こども参観日」も実施されています。「大好きなお母さんが白衣姿で働く姿はとってもカッコ良く映るようです」と仲光さん。参加後は、出勤するママに「頑張ってる」とお子さんが声をかけたり、家庭で病院の話が増えたり、働き続けられる環境に繋がると、毎年好評を得ています。「安全・安心だけではなく働くことにプライドを持てるよう、これからも共に努力していきます」と仲光さんは述べられました。

名本さんは「マンネリ化すると新しいことに挑戦する“やる気”が起りにくくなります。総看護長が計画的かつ有効な研修をしてくださるので良い刺激になっています」と話されました。

これから取り組むべき課題とは。

大和中央病院は、厚生労働省が平成22年から努力義務化している「新人看護職員研修制度」を平成24年から本格的に取り入れ、新人研修の体制を整えています。その



責任者でもある波積さんは「今回のSWCの導入の経験を元に、新人看護職員や途中入職の人にも、実技を踏まえた研修を行い、新しい取り組みの理解と納得が得られるようにきちんと伝えていきたいと思っています。とくに途中入職の人や、病棟によっては新しい器材を使う症例が少ない場合もあるので、そういった病棟の人には、現場をラウンドして手技を伝えるほか、手順書作成、DVD活用など多角的な対策も取り入れたい」とおっしゃいます。

さらに仲光さんは独自に、SWCに関するアンケート調査を実施。「きちんと評価の検証結果を示すことで、自己を振り返る機会を与え、再認識した行動に繋がるようにしています」と語られ、日々意欲的に活動されていると感じました。

最後に、「組織の中には、『今までのものを使いたい』という看護師もいると思います。もちろん、その人たちにもSWCの特長や針刺し事故の問題は『理解』できているはずですが、その商品がどんな価値を提供してくれるのかを『納得』しなければ、『実行』は起きません」と語る仲光さんの言葉は、マネジメントの本質である「理解」「納得」の重要性を強く示唆され、今回のインタビューを終了しました。

特定医療法人ダイワ会

大和中央病院



- 開設 / 1969年9月
- 所在地 / 大阪市西成区長橋1丁目2-7
- 病床数 / 一般：143床、療養：84床
- 職員数 / 約200名
- 診療科目 / 内科、外科、整形外科、
心臓血管外科、脳神経外科、
リハビリテーション科、放射線科

院長 田中一穂先生



<http://www.jms.cc>

製造販売元
株式会社 ジェイ・エム・エス

お問い合わせ先
東京本社 第一営業部 TEL (03) 6404-0601
〒140-0013 東京都品川区南大井1丁目13番5号 新南大井ビル